

連載：研究者になる！—第14回—

アジア・アフリカ地域研究研究科・准教授 中村 沙絵

●何でも挑戦する学生時代

父親の転勤で、中学時代に住んでいたインドネシア。スハルト政権が倒れた時期で、大規模な暴動などを経験し、広く世の中の仕組みのことや、自分とは違う生活をおくる人々の考えや生き方に興味を持ったことが研究者を目指すことへの始まりでした。運動も音楽もボランティア活動もしたい！と欲張りな私は、学生時代、女子サッカー部やサンバサークル、大学外のNGOなど課外活動に多くの時間を費やしました。NGOでの活動を通して津波復興支援の一環でスリランカを訪問したことがきっかけで、後にスリランカの全てに魅了され、スリランカ研究で進学することになるのです。

●様々な出会いが今に繋がっている

学生時代、忘れられない様々な出会いがありました。胡瓜の光合成をはじめ、植物の素晴らしさを教えてくれる生物学の先生、聖書をジェンダーの視点で読む先生。2人の先生の授業はとにかく興味深く感心することばかりで、何かを追求することはこんなにも素晴らしいことなんだと感じさせられました。また「私もいつかこんな本を書いてみたい」と思うほど感動した民族誌との出会いもあり、いつの日か研究者を目指す自分がいました。

大いに影響を受けることになったスリランカ訪問では、スリランカの人、食べ物、風景、いろんなものに魅せられました。スリランカにまた行きたいという思いと、自分も少し関わっていた津波復興支援についてもう少し考えてみたいという思いから再訪問しました。そこで、とある老夫婦に出会い、みずばらしい格好をしている私に声をかけてくれました。シャワー、トイレ付きの部屋を用意してもらい、なんと毎日の食事までお世話になることに。いつも私のことを気かけ、本当の両親のように親切にしてもらいました。かけがえのない出会いとなり、私自身も彼らのことを「お父さん、お母さん」と呼ぶようになっていました。私にとってその方々との出会いが大きく、「この人たちのことをもっと知りたい」と素直に思うようになりました。そこから、高齢者について研究し、老人ホームの民族誌を書くことに至りました。

出産・育児を経て、卒業できるかどうかわからない状況の時もありました。産後は所属もなく保活に苦労し、ようやく保育園に預けられるようになったのは息子が2歳のときでした。その間は、両親にみてもらったり、就寝後の時間を使うなどして「とにかく、本だけ出せればそれでいい。研究者になれなくてもいい」と思って博論を書いていました。京大の大学院（ASAFAS）の

先生方が支援してくださり、何とか研究者の道を諦めずに来られました。自身の著書を出すことができ、強い意志を持って続けてきてよかった、と今心から感じています。

現在は、スリランカをはじめとする南アジア地域の老い・病い・死とケアをめぐる問題を研究しています。地域のことを相対的・総合的に見て、生態系や地理的な特徴、文化的な特性、社会構造等がどのように関係しているのかという地域研究の視点と、文化をもっている人間の社会的・文化的側面を追求する文化人類学の視点から研究を進めています。

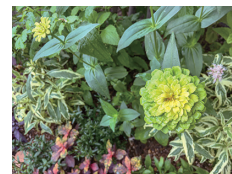
●調査に協力してくださった方々のためにも、意義のある研究を

私が心がけていることは、とにかく、現地の人たちに教えてもらったことを一つ一つ大事に理解し、文字にし、忠実に伝えること。遠回りだったとしても、調査に協力してくれた人たちに何らかの意義ある仕事をする。現地で調査に協力してくれている人たちにとっても、私にとっても、学術的にも大事な問題を探し続けるようにしています。そして、まずは単著を英語にして現地の人たちに還元したい、と考えています。その後はもう一度、長期のフィールドワークをしたいです。

裁量労働なので、子育てもしやすい環境ではありますが、平日のお迎え時間までにできることが限られていて、休日や夜間（子供を寝かした後）などに仕事が集中してしまうこともあります。これが続く和家人も疲れてきてしまうので、ときには「忘れ」、裁量労働だからこそ、オンとオフをちゃんと意識しなければと思っています。また、夫や子どもはもちろん、それぞれの両親、姉家族、近所の方々やベビーシッターさんなど、本当に色々な方々に助けられています。ずっと感謝の気持ちを忘れず、自分のやりたいことを諦めることなくやっていけたら、と思います。スリランカでは、内戦後、コミュニティの社会構造や関係性が大きく変わっている地域があります。そういう場所も含めて、スリランカのことをさらに深く知って、世の中に発信していきたいです。

編集後記

ずいぶん寒くなり、セーターを着ようか迷う日も出てきました。セーターのお庭はすっかり秋の色、新入りの花たちがとても綺麗です。お近くに来られた際は、ぜひお立ち寄りください。



Gender Equality Promotion Center

〒606-8303 京都市左京区吉田橋町
 電話 075 (753) 2437
 FAX 075 (753) 2436
 E-mail w-shien@mail2.adm.kyoto-u.ac.jp
 HP <http://www.cwr.kyoto-u.ac.jp/>